

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：34301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13421

研究課題名(和文)19世紀フランス詩における宗教的混淆 教育から文学創造へ

研究課題名(英文)Religious Mixture in nineteenth-century French Poetry: from Instruction to Literary Creation

研究代表者

塚島 真実 (TSUKASHIMA, Mami)

大谷大学・文学部・非常勤講師

研究者番号：80761402

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、フランスの19世紀、特に1850年代から1870年代の、高踏派からランボーにいたる詩作品におけるヘレニズムとキリスト教の混淆を、文学創造に教育が与える影響の観点から考察した。詩作品における神的形象の身体描写の典型的要素に19世紀当時の修辞学および文学の教材が一定の役割を果たしていること、また、伝統的な詩型をもつ作品においても新たな科学的知識や民衆文化が柔軟に取り入れられ、「規範」からの超出が目指されていたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の第一の意義は、神的形象という具体的な分析対象を据えて、作者である詩人を出発点に政治的言説や歴史的著作、造形美術といった多分野の様々な媒体へと射程を広げるというアプローチを取ることで、領域横断的に宗教性を究明していく可能性を示したことである。

第二の意義は、文学作品の分析方法を学校教材に使用された文献に適用することにより、宗教・道德教育のための教材作成の戦略を綿密なテキスト分析によって明らかにし、文学研究と教育史研究を架橋する新たな方法論の端緒を示したことである。

研究成果の概要(英文)：In this study I clarified the nature of the religious mixture of Hellenism and Christianity in nineteenth-century French poetry - especially, the poems written from the 1850s to the 1870s, in other words, the period from the Parnassians to Rimbaud - by examining how instruction influenced Literary Creation during that time. I argued that the rhetorical and literary materials of the nineteenth century were two of the most important sources of the typical elements that constituted the physical portrayal of the divine figure in the poems concerned. I also demonstrated that some of the poets flexibly incorporated new scientific knowledge and popular culture into their poems that had traditional forms, and thereby attempted to exceed the 'norm'.

研究分野：フランス文学

キーワード：フランス文学 フランス詩 ランボー 高踏派 美術批評

1. 研究開始当初の背景

ランボーには多大な先行研究の蓄積があるが、そこで欠落しているのが、ランボーが受けた学校教育に関する研究である。とりわけ初期のランボーの作品は多様なパロディやパスティシュ(文体模倣)に特徴づけられる。それだけに、学校教育はランボーの詩的個性の形成に深く関わるものだが、学校教育の影響を本格的に研究対象としたものはない。また、ランボーに限らず作家研究における教育との関連について、教材分析を中心に据えた主題論的研究は、モデルとなるような方法論は確立されていないのが現状である。一方で、ランボーが詩作の初期に多くパロディやパスティッシュに取り入れた高踏派についての研究は、Y. モートレットの通史(2005)および高踏派の受容史研究(2006)によってようやく基盤が整いつつある。しかし高踏派の作品においてはヘレニズムの題材があまりに明示的に存在するがゆえに、高踏派のもつ宗教的多様性と複雑性について本格的に論じられてはいない。

研究代表者は、ランボーの作品における身体の表象を通して、詩人のキリスト教的モラルに対する精神的闘いを研究してきた。初期のランボーが模倣したとされる高踏派の作品を分析する過程で、それらの作品に現れる異教神話の形象にキリスト教的要素が取り込まれているという見通しを得た。そこからランボーにおける宗教的混淆の視点において高踏派との比較分析を進め、ランボーの独創とされてきた、神話的形象に卑俗なレアリスム描写を用いる表現が高踏派にすでに見られることを明らかにした。そして、ヘレニズム偏重と見做されてきた高踏派がもつ宗教観の複雑さをさらに追究する必要性を確信した。

一方、ランボーと高踏派との比較分析を進める過程で、ランボーの作品分析において考察の先鞭をつけた学校教育の影響の重要性を再認識した。そして、学校教材が当時の一般的な神話の知識やキリスト教道徳の主要な媒体であるだけでなく、高踏派やランボーの作品に現れる宗教的混淆の源泉の一つとして捉えられるとの仮説に至った。高踏派とランボーは世代の違いはあるが、公教育における古典重視の教育方針は不変であり、宗教・道徳や古典語・フランス語および修辞学の教育に使用された教材は大きな変化がないことから、これまでに収集したランボーの教育に関する資料を、より広く19世紀後半の教育における宗教的混淆の分析に有効活用できるとも考えた。

2. 研究の目的

フランスの1850年代～1870年代の詩、特に高踏派とランボーの作品、およびこれらの詩人たちの学校教育を受けていた時代の主要な学校教材に現れる神話的形象を中心的分析対象とした。そして、以下の3点を目標とした。

(1) 1830年代～1860年代に使用された代表的な学校教材に現れる神話的形象を分析し、キリスト教道徳へのギリシア古典の利用という観点から学校教材における宗教的混淆を跡づける。

(2) 『現代高踏派詩集』(1866、1871、1876)および高踏派詩人のうちルコント・ド・リール、バンヴィル、グラティニーの1850年代～1870年代に出版された詩集、ランボーの作品(主として1870年代前半)に現れる神話的形象の表象において、ヘレニズムとキリスト教の混在を明確化し、従来「断絶」という言葉で語られてきた高踏派とランボーのあいだに、宗教的混淆という点での連続性を確定する。

(3) 以上の結果((1)、(2))を踏まえて、ヘレニズムとキリスト教という一見対立するものの混淆が教育を通して矛盾なく受容されていたことを論証する。その上で、個々の詩人にお

いて、宗教的混淆がどのような創造的表現を獲得しているのかを明らかにし、19世紀のフランス社会に特有の多層的な宗教意識の解明に繋げる。

3. 研究の方法

(1) 研究方法は、資料収集とそれに基づく作品分析である。収集及び分析の対象となる文献は以下の(A)・(B)の2つに大別される。

(A) 1850年代～1870年代にかけて書かれた高踏派およびランボーの作品、それらに関連する文芸批評：『現代高踏派詩集』(1866、1871、1876)、ルコント・ド・リール、バンヴィル、グラティニーの1850年代～1870年代に出版された詩集、ランボーの作品。1850年代～1870年代の高踏派の作品に対する批評、および高踏派の詩人たちが著した文芸批評。

(B) 1830年代～1860年代にかけて、公教育において、宗教・道徳、および古典語・フランス語、修辞学教育に使用された文献：聖書概要、公教要理、文法書、作品引用集。他に、上記の詩人が読んだとされる、19世紀後半に広範に流布したギリシア神話およびキリスト教に関連する著作。

神話的形象に関わる説明や描写、あるいは宗教性や神話に関連する言説を(B)から抽出し、それを踏まえて(A)の作品群に現れる神話的形象についてテキスト分析を行った。

(2) フランス国立図書館の電子化資料 Gallica を中心に資料調査を行った。電子化されていない資料や、出版年が異なるいくつかのバージョンを参照する必要がある教材についてはフランス国立図書館で資料収集を行った。

4. 研究成果

19世紀前半のロマン派の詩人においては、神やイエス、聖人が主要な詩人像であった。それに対して、19世紀後半の高踏派、象徴派と呼ばれる詩人たちは神話的形象の、とりわけ英雄的な表象に同化することは少ない。ランボーが多分にロマン派的な「見者」像成立以前に抱いていた詩人像を明らかにするため、他の詩人がもつ「道化」的詩人像との関連を考察した。「道化」が芸術家としてある種の超越性・聖性を付与されて描かれるのは19世紀詩に特有の現象と考えられるが、一方でそうした道化的芸術家像は「ブルジョワ/芸術家」という構図が産み落としたモデルでもある。ランボーはそうした社会的構造には関心がなく、道化のもつ超人的な身体性に注目をしている。

また、フランス詩史において高踏派の特徴とされてきたのがヘレニズム彫刻を模した身体の表象であった。一方、小説と絵画において19世紀に花開いたリアリズムを象徴するのが、理想を排し醜悪さとも対峙する身体の表象である。特に多産な批評家でもあったバンヴィルに着目し、詩人の美術批評・文芸批評を手掛かりに、詩人におけるリアリズムの概念と詩作の関連を考察した。バンヴィルにおいてリアリズムは、目に見えるもの以上の真理を謳うべき詩というジャンルとは相容れないものと断定される。だが一方でリアリズムの語を使わないながら現実を細密に描写する態度について称賛する批評が見られる。神話的世界だけでなく現代社会への諷刺詩もものしたバンヴィルのジャーナリスト的視線は、現実を観察するという点でリアリズムと通底するものがある。

身体描写における「規範」を探る上で、主に19世紀に使用された修辞学および文学の教材が重要な資料となった。それらとの比較により、「規範」に則った神的形象の主題を取り上げながらも、そうした神的形象の身体描写においてこそ革新性が際立つことが確認され

た。たとえば、19 世紀に得られた科学的知識・技術を示唆する表現が挙げられる。こうした新しさの源について、小説といった他の文学ジャンルや絵画・彫刻といった他ジャンルとの関連を今後整理していくことで、より当時の教育によって得られた素養と各詩人における文学的個性との偏差がより明確になるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Mami Tsukashima	4. 巻 113
2. 論文標題 Le clown est-il la figure du poete chez Rimbaud ? D'un squelette dans "Bal des pendus" au "voyant"	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 フランス語フランス文学研究	6. 最初と最後の頁 201-216
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.20634/e11f.113.0_201	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 塚島 真実	4. 巻 110
2. 論文標題 ランボーの変身譚 「ボトム」を読む	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 フランス語フランス文学研究	6. 最初と最後の頁 73-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.20634/e11f.110.0_73	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 塚島真実
2. 発表標題 バンヴィルの「レアリズム」
3. 学会等名 日本フランス語フランス文学会春季大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 塚島真実
2. 発表標題 ランボーの詩人像 「絞首罪人の舞踏会」を中心に
3. 学会等名 日本フランス語フランス文学会秋季大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----